

タデ食う虫と作家の眼

—— 映画文学人生論

武田泰淳 (1912-76)

『タデ食う虫と作家の眼』(2009) 「清流出版」

参考：日本誕生 (1959) 監督：稲垣浩

釈迦 (1961) 監督：三隅研次

十戒 (1956) 監督：B.デミル

キング・オブ・キングス (1961) 監督：N.レイ

神々の復活を歓迎する

武田泰淳の映画エッセイ集『タデ食う虫と作家の眼』を読む。

小学校に入学する一年ほど前に、はじめて映画を見せられた。母と叔母のあいだにはさまり、映画館の二階の一ばん前に坐っていると、スクリーンに映像がうつし出される。ストーリーはおぼえていないが、いきなり泣きはじめた。

「ばかねえ、これは活動写真じゃないの」「あらあら、ほんものじゃないのよ」と、なぐさめられても、泣きやもうとしない。

そんな幼児が小学校、中学校、高校へと進むにつれて、映画好きになり、ほかの現象には興味もてなくなった。戦争をはさんで、五十男になっても、映画に対する彼の感情は変わっていない。おそらく死ぬまで、そのような愚かしくも忠実な観客でありつづけただろう。

しかし、戦争を体験した武田は、「滅亡について」というエッセイも書いている。映画衰退のかけりも見逃さない。昭和三十七年の正月に今井正監督の『日本のお婆ちゃん』と羽仁進監督の『充たされた生活』（原作は石川達三）を見に映画館に入ると、不思議なことに、館内はがら空きだった。二本とも、すぐれた作品なのに、お客さんにきらわれたようだ。なぜだろうか考える。

昭和三十七年といえば、日本経済が高度成長期に移行した頃だが、映画産業にはかけりが見えて



映画文学人生論

タデ食う虫と作家の眼

いた。すぐれた作品をつくっても観客がこない現象を作家の眼でとらえ、疑問視していたのだ。

その少し前までが映画の黄金時代だった。映画会社は巨額の資本を投下して超大作を製作し、多数の観客に映画館に足を運ばせた。超大作とは、たとえば、『十戒』『ベン・ハー』『キング・オブ・キングス』『エル・シド』『日本誕生』『釈迦』『親鸞』などの宗教映画だ。

武田泰淳は「宗教映画の魅力」を論じ、「神々の復活を歓迎する」。そして、「テレビの攻勢に対抗して、イチかパチかの大勝負をいどんだのが『十戒』『ベン・ハー』等の超大作である所から察するに、宗教ものには何か安全な秘力でもあるのだろうか」と問いかけている。

モーゼをチャールトン・ヘストン、キリストをジェフリー・ハンター、釈迦を本郷巧次郎、天照大神を原節子、日本武尊／須佐之男命を三船俊郎を演じているが、現実には人間は神にも仏にならない。「ばかねえ、これは活動写真じゃないの。あらあら、ほんものじゃないのよ」。

タデ食う虫も好き好きだが、すべてのものは変化する。変化して、とどまることを知らない。変化しないものは「存在」ではあり得ない——というのが、死ぬまで愚かしい観客であり続けた武田泰淳という作家の眼である。

暮れなんとしてほのかに蓼の花 夏目漱石